

第18回
視覚発達支援研究会 in 名古屋

パネルディスカッション テーマ1

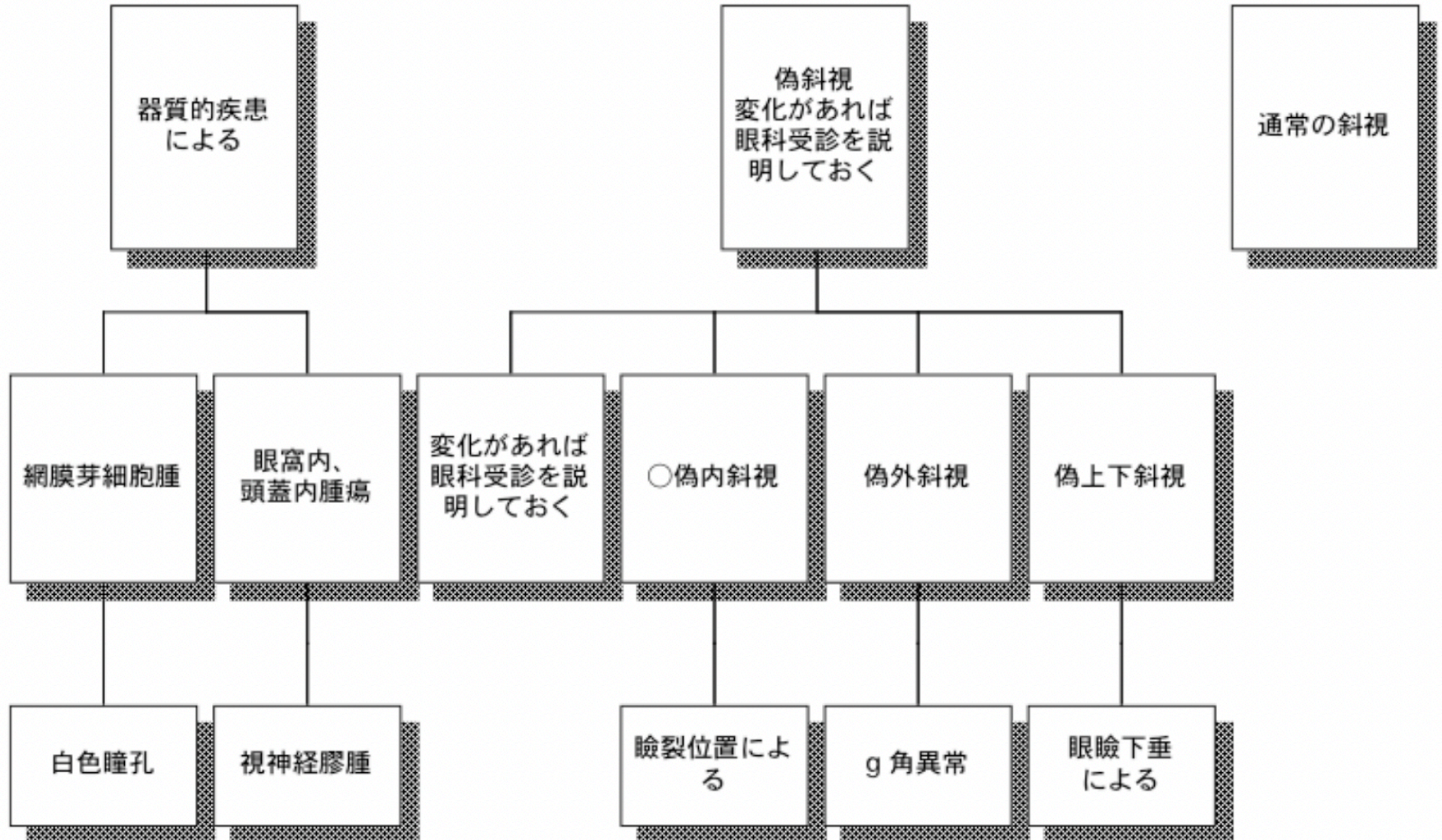
「学童期における斜視手術」



かわばた眼科
川端秀仁

斜視を主訴とする3つの場合

視線がずれていても斜視とはかぎらない



斜視の治療目的

1. 眼位の整復
2. 視力の改善
3. 両眼視の獲得

治療原則

- 発見は可能なら1~2歳前
- 治療は遅くとも小学校入学前に開始したい
 - 両眼視機能の発達時期
 - 生後1歳ぐらいから発達し5~6歳で完成
 - 2~3歳での治療開始が望ましい
- 斜視弱視があれば早期治療が必要

学童期の斜視治療

1. 外観の改善（眼位の整復）
2. 弱視の改善
3. 調節性内斜視に対する眼鏡処方
4. 両眼視の維持／回復

斜視・弱視治療方法概略

1. 眼鏡処方（屈折矯正・プリズム処方）
2. 非観血的（輻輳訓練、ボツリヌス療法）
3. 観血的（斜視手術）
 1. 筋弱化：後転術、切腱術、切筋術など
 2. 筋強化：短縮術、前転術、縫縮術など
4. 弱視治療（健眼遮蔽など）

学童期の斜視

1. 内斜視

1-1. 調節性内斜視

1.2. 残余内斜視

1.3. 続発性内斜視

2. 外斜視

2-1. 間歇性外斜視

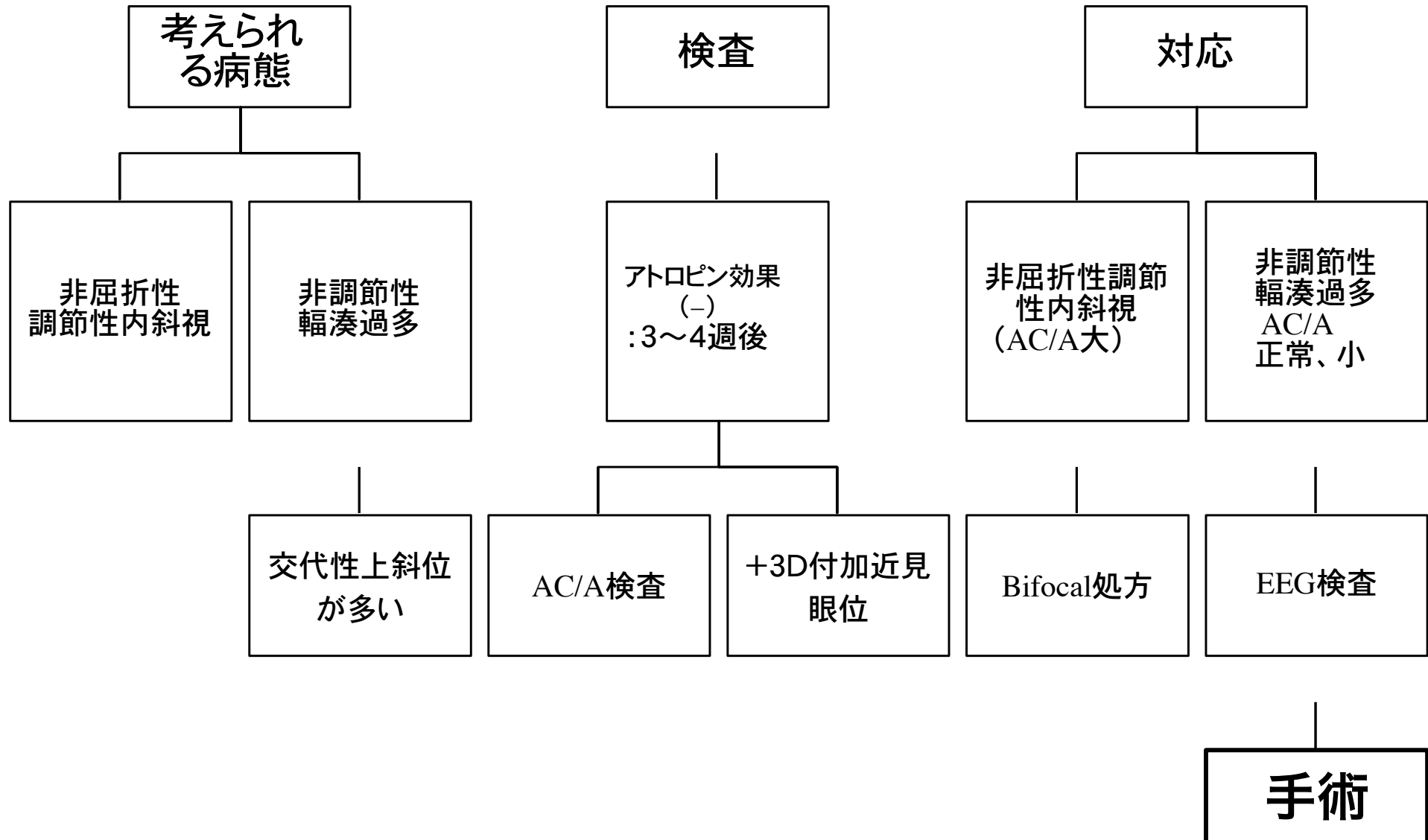
3. 後天性斜視

3-1. 外傷

3-2. 頭蓋内疾患などによる急性斜視

内斜視＋遠視<1.5Dのとき

考えられる病態と対応



眼鏡処方後の対応

2カ月後の検査

遠見：正位
近見：正位

眼鏡装用継続

遠見：正位
近見：内斜視

前スライド治療

遠見：内斜視軽減
（残余あり）
近見：内斜視軽減
（残余あり）

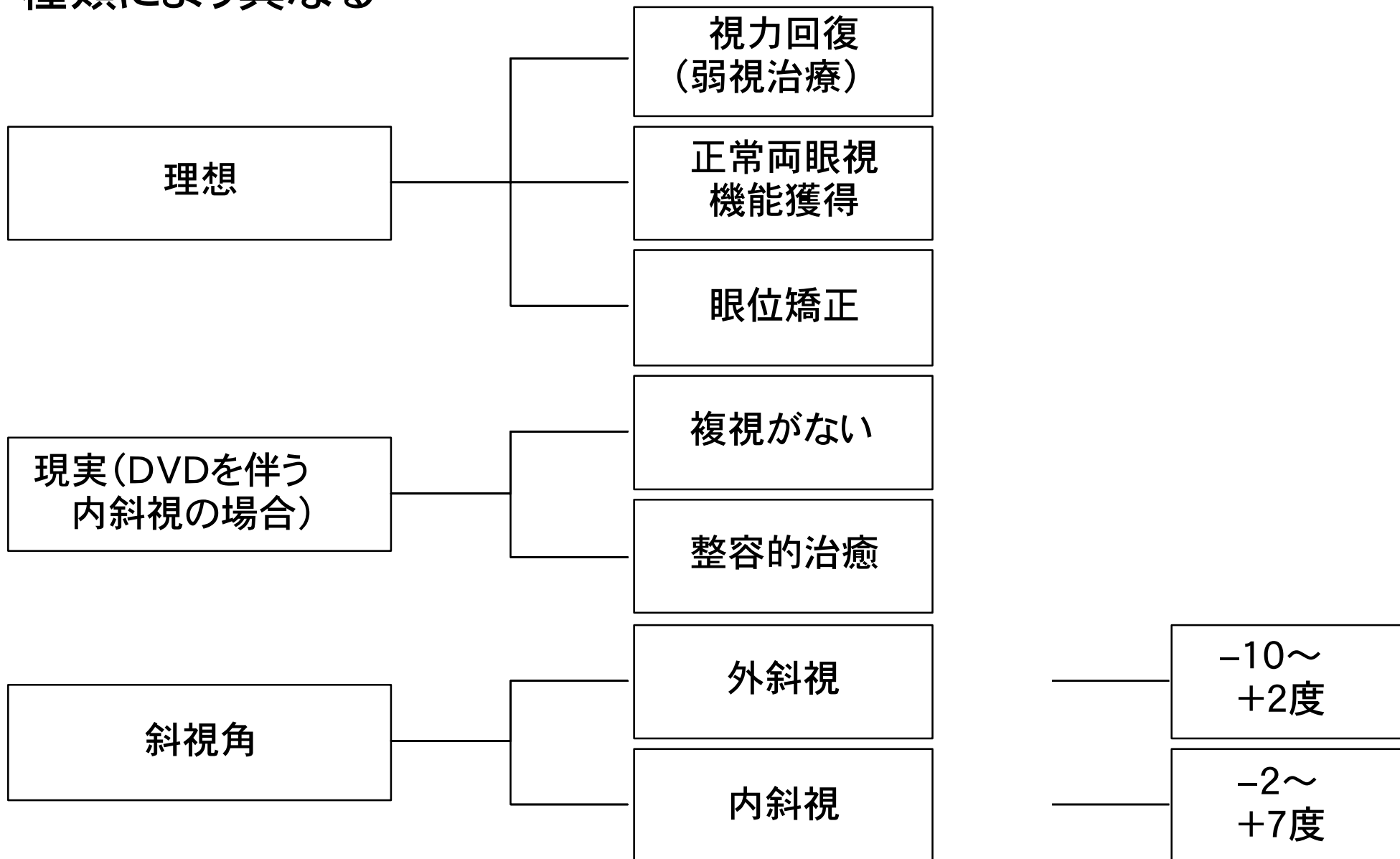
経過観察

遠見：内斜視
（ほぼ不変）
近見：内斜視
（ほぼ不変）

手術

手術目標

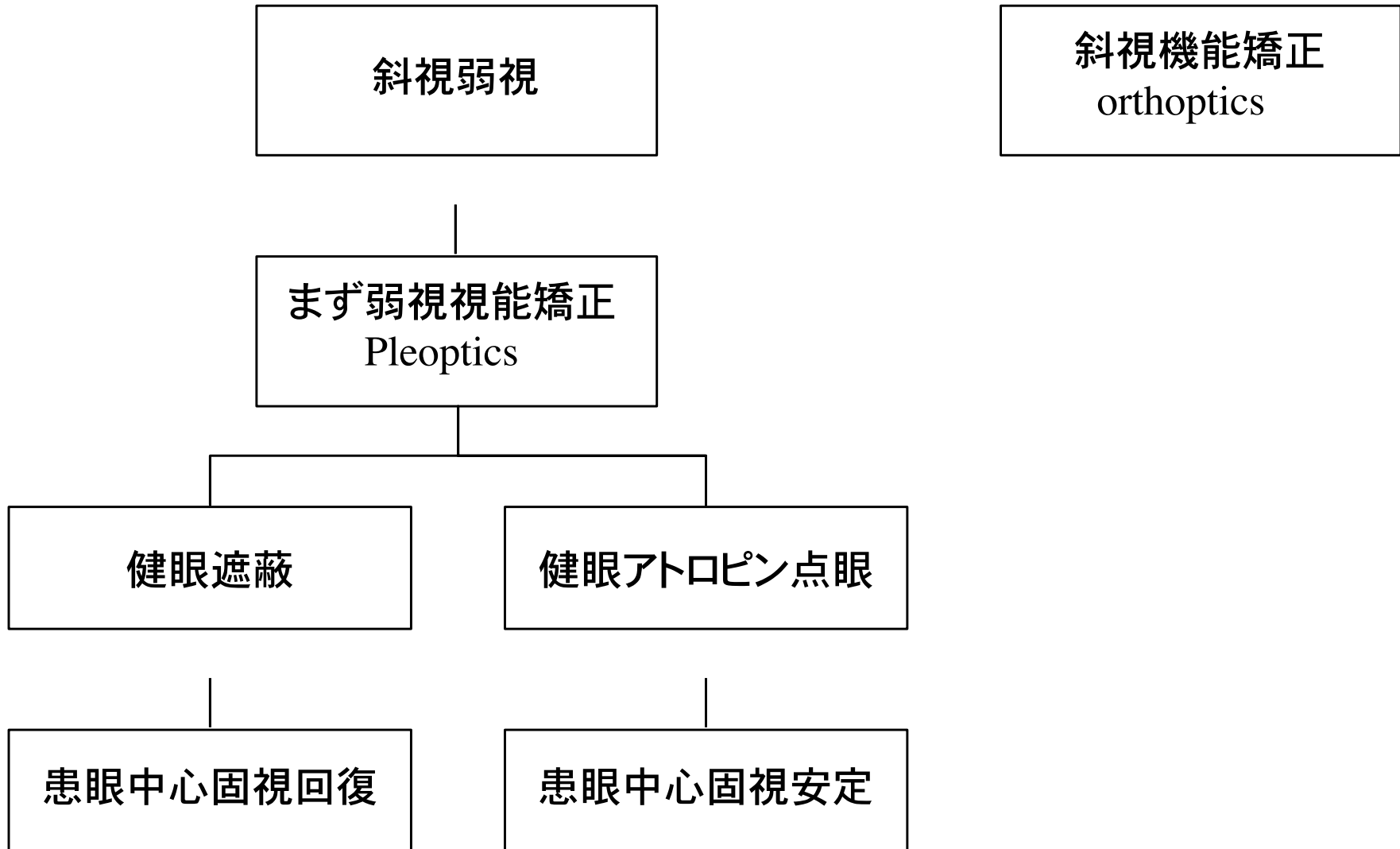
種類により異なる



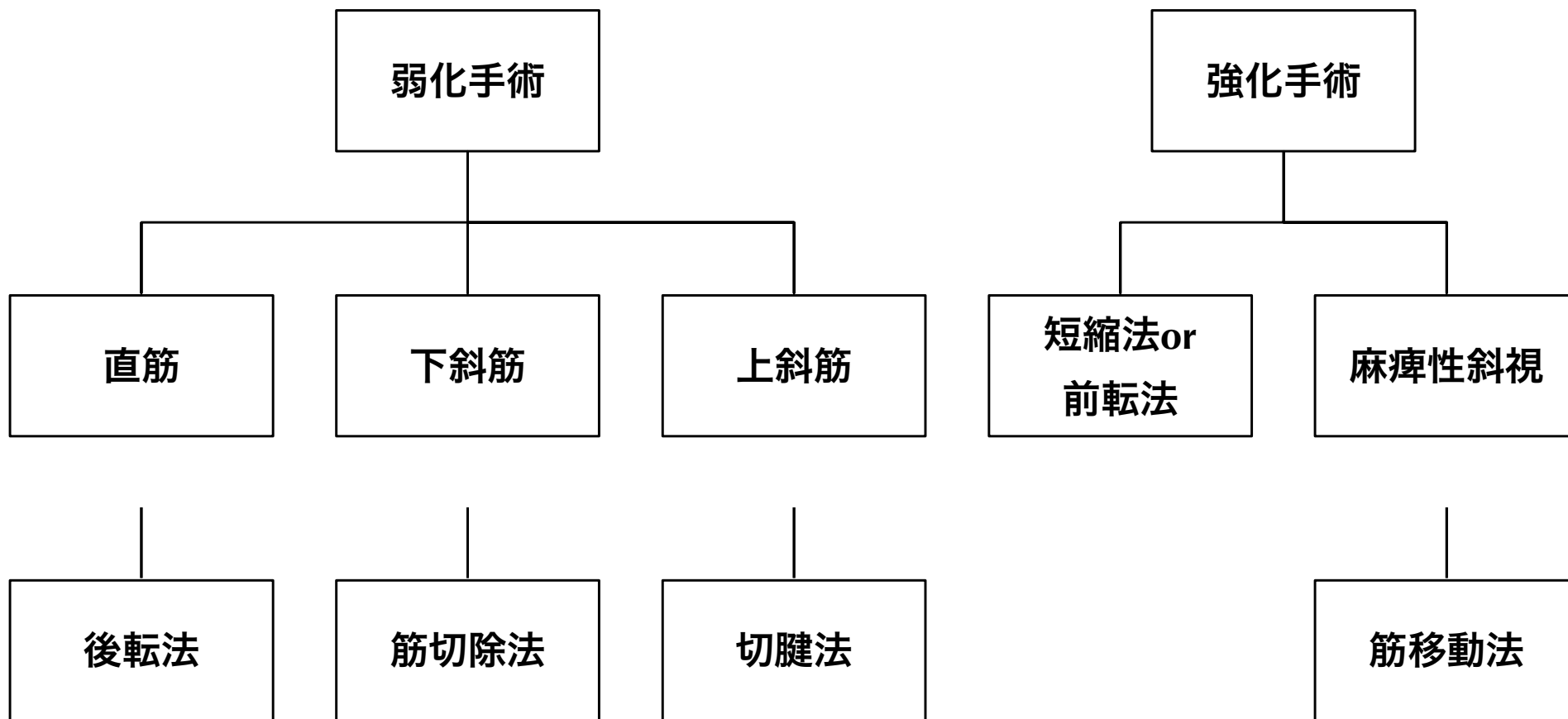
手術時期について

- 原則：学童期では斜視手術は急ぐことはない
 - 屈折矯正、プリズム矯正、輻輳訓練
 - 視力差があれば適用あれば検眼遮蔽も行う
- 手術する場合
 - 外観が気になり本人が強く望む場合
 - 残存していた両眼視機能が失われてきた場合で、他の方法が取れない場合
- 術後斜視が再発する可能性があることを十分説明しておくこと

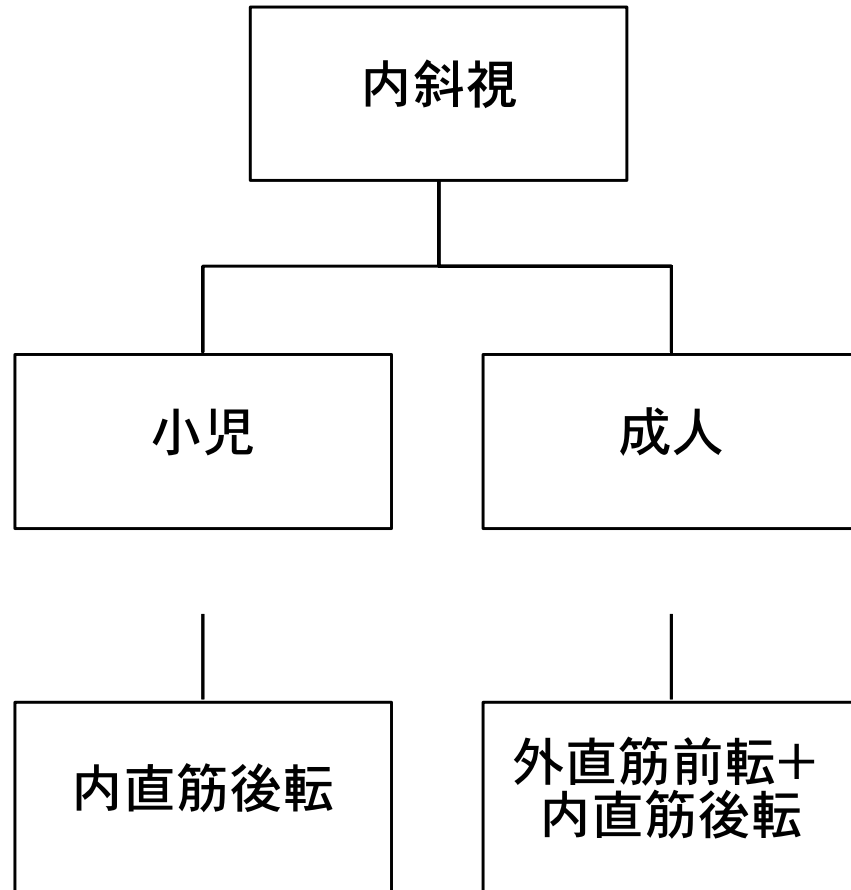
参考：斜視弱視へ対応



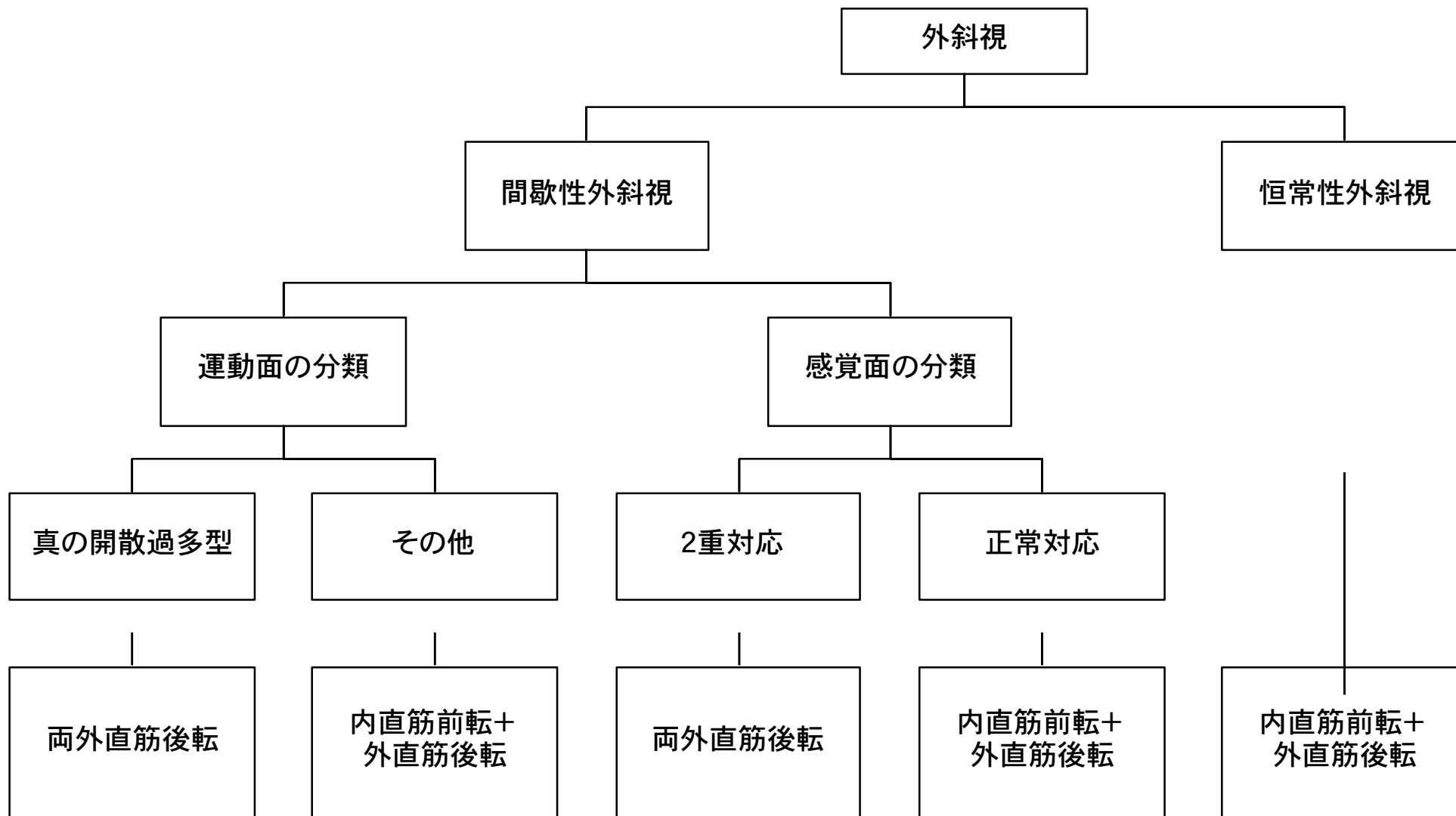
参考：手術術式



参考：内斜視の術式



参考：外斜視の術式



参考：上下斜視の術式

